

## [38] ボツワナ

### 1. ボツワナの概要と開発課題

#### (1) 概要

(イ) 1966年の独立当初より複数政党制による安定した政治運営が行われており、ボツワナ民主党（BDP: Botswana Democratic Party）が一貫して政権を維持している。2008年4月には引退したモハエ大統領の後を継ぎ、憲法の規定により、カーマ副大統領が第4代大統領に就任した。

ボツワナ外交は近隣諸国との友好平和路線を基調としており、南部アフリカ諸国で構成されるSADCに加盟しつつ、その事務局を首都ハボロネに置くなど、積極的な南部アフリカ外交を展開している。

(ロ) 独立当初のボツワナ経済は牧畜を基幹産業とし、牛肉の輸出に全面的に依存する世界最貧国の一つであったが、1967年のダイヤモンド、その後の銅、ニッケル、マンガン、石炭等の鉱物資源の発見により、経済は急速な成長を遂げ、1998年には中所得国に分類されるに至った。2006年のボツワナの一人当たりGNIは、5,900ドルであり、アフリカにおいて高い水準にある。産業構造は、鉱業、とりわけダイヤモンド産業に偏重しているものの、ボツワナ政府は、国内産業の多角化によりこうした状況の打開を目指しており、外資導入にも積極的である。

貿易面では、南部アフリカ関税同盟（SACU: Southern African Customs Union）諸国及び旧宗主国である英国をはじめとしたEU諸国が最も重要な貿易相手国となっている。

(ハ) 我が国は、ボツワナより主としてダイヤモンドを輸入しており、ボツワナへは家電製品や自動車などを輸出している。

2008年1月には首都ハボロネに在ボツワナ日本国大使館が開設され、両国関係のより一層の発展が期待される。

#### (2) 開発計画

ボツワナが抱える開発問題は、国民のHIV/エイズ感染率の高さ（24.1%、2005年）と高失業率、熟練労働者・技術者の不足などである。

ボツワナ政府は、1997年に策定された長期的経済開発を目標とする「ビジョン2016」に基づき、「第9次国家開発計画（NDP9: National Development Strategy 9）」を推進している（2004年～2009年）。現在準備中のNDP10（2009年～2016年）においても、NDP9の開発戦略は継続され、産業の多角化、マクロ経済の安定、公的部門の改革、民間部門への支援強化、雇用創出、貧困削減、HIV/エイズ対策に重点が置かれる予定であるが、人材育成といったソフト面での開発の必要性にも焦点が当てられることとなっている。

ボツワナ政府は、NDP10後に予想されるダイヤモンド産業からの歳入減の対策として他産業の成長の必要性を認識しており、民間部門成長のための支援を促進していく方針である。ただし歳入面において、他産業の成長をもってしても現在のダイヤモンド産業の代替にはならないと認識しており、将来的には政府支出の減少を余儀なくされるなかで、開発戦略の実施を迫られることになる。

表-1 主要経済指標等

指 標		2006年	1990年
人 口	(百万人)	1.9	1.4
出生時の平均余命	(年)	50	63
G N I	総 額 (百万ドル)	9,935.40	3,685.69
	一人あたり (ドル)	5,570	2,560
経済成長率	(%)	2.1	6.8
経常収支	(百万ドル)	1,939.77	-19.30
失 業 率	(%)	—	—
対外債務残高	(百万ドル)	408.47	552.92
貿 易 額 <sup>(注1)</sup>	輸 出 (百万ドル)	5,291.83	2,004.87
	輸 入 (百万ドル)	3,451.28	1,986.87
	貿易収支 (百万ドル)	1,840.55	18.01
政府予算規模 (歳入)	(百万ブラ)	—	3,581.76
財政収支	(百万ブラ)	—	1,345.92
債務返済比率 (DSR)	(対GNI比, %)	0.6	2.9
財政収支	(対GDP比, %)	—	19.1
債務	(対GNI比, %)	3.5	—
債務残高	(対輸出比, %)	6.1	—
教育への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
保健医療への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
軍事支出割合	(対GDP比, %)	—	4.1
援助受取総額	(支出純額百万ドル)	65.09	145.22
面 積	(1000km <sup>2</sup> ) <sup>(注2)</sup>	582	
分 類	D A C	高中所得国	
	世界銀行等	iii/高中所得国	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		—	
その他の重要な開発計画等		ビジョン2016、第9次国家開発計画	

注) 1. 貿易額は、輸出入いずれもFOB価格。

2. 面積については“Surface Area”の値(湖沼等を含む)を示している。

表-2 我が国との関係

指 標		2007年	1990年
貿易額	対日輸出 (百万円)	3,414.03	420.64
	対日輸入 (百万円)	1,763.24	3,985.38
	対日収支 (百万円)	1,650.79	-3,564.74
我が国による直接投資	(百万ドル)	—	—
進出日本企業数		—	—
ボツワナに在留する日本人数	(人)	36	9
日本に在留するボツワナ人数	(人)	10	4

## ボツワナ

表-3 主要開発指数

開 発 指 標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢饉の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	28.0(1990-2005年)	
	下位20%の人口の所得又は消費割合 (%)	3.2(1993年)	
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	13(1996-2005年)	
初等教育の完全普及の達成	成人(15歳以上)識字率 (%)	81.2(1995-2005年)	68.6(1985-1994年)
	初等教育就学率 (%)	85(2004年)	83(1991年)
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率(初等教育)	1(2005年)	
	女性識字率の男性に対する比率(15~24歳) (%)	95.6(2005年)	
乳幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	87(2005年)	99(1970年)
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	120(2005年)	142(1970年)
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	380(2005年)	
HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止	成人(15~49歳)のエイズ感染率 <sup>(注)</sup> (%)	24.1 [23.0-32.0](2005年)	
	結核患者数 (10万人あたり)	556(2005年)	
	マラリア患者数 (10万人あたり)	48,704(2000年)	
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	95(2004年)	93
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	42(2004年)	38
開発のためのグローバルパートナーシップの推進	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出と海外純所得に占める%)	0.5(2005年)	2.8
人間開発指数 (HDI)		0.654(2005年)	0.674

注) [ ]内は範囲推計値。

## 2. ボツワナに対するODAの考え方

### (1) ボツワナに対するODAの意義

ボツワナは中所得国に分類されるとはいえ、国内産業は鉱業に依存しており、所得格差も大きい。日本の約1.5倍の広大な国土に人口はわずか186万人程度であり、人材不足が深刻である。また、国民のHIV/エイズ感染率も非常に高い。ボツワナの産業多角化及び産業促進のための起業家・技術者、またHIV/エイズ対策のための医療関係者といった人材育成を支援することは、ODA大綱で設定された重点課題である「貧困削減」や「持続的成長」を達成する上で極めて重要であるとともに、ボツワナ政府による開発戦略であるNDP10を支援することにもつながる。また、こうした分野への支援は、アフリカにおけるグッド・ガバナンスの模範例であるボツワナのさらなる経済発展に寄与することにもなる。

### (2) ボツワナに対するODAの基本方針

ボツワナは一人当たりGNIが高いため、無償資金協力供与の対象外であり、円借款も環境、人材育成、防災・災害対策、格差是正の4分野に限定されるが、円借款、技術協力及び草の根無償資金協力を効果的に活用し、産業の多角化、HIV/エイズ対策、電力事情の改善等に対する援助を実施していく。

### (3) 重点分野

これまで、円借款による経済インフラの整備、技術協力による農業、行政、人的資源などの分野における能力向上を中心に支援してきており、今後とも、こうした経済成長戦略のためのインフラの整備、組織・人材育成、貧困地域の開発促進を中心に支援していく。

また、ボツワナ政府からは、人材育成、産業の多角化、電力事情の改善、HIV/エイズの蔓延防止等に関する我が国支援への期待が表明されており、こうした分野においても支援の可能性を探求していく。

### 3. ボツワナに対する2007年度ODA実績

#### (1) 総論

2007年度のボツワナに対する無償資金協力は0.15億円（交換公文ベース）、技術協力は1.79億円（JICA経費実績ベース）であった。2007年度までの援助実績は、円借款132.46億円、債務免除36.74億円、無償資金協力29.60億円（以上、交換公文ベース）、技術協力45.59億円（JICA経費実績ベース）である。

#### (2) 無償資金協力

草の根・人間の安全保障無償資金協力を保健・医療分野で2件実施した。

#### (3) 技術協力

農業、科学・文化、行政などの分野において8名のJOCVの派遣を行うとともに、観光、行政の分野において2名のシニア海外ボランティアを派遣した。また、保健・医療、農業、教育等の分野において41名の研修員の受入を行った。

### 4. ボツワナにおける援助協調の現状と我が国の関与

ボツワナ財務・開発計画省主催の開発パートナー協調会議が2007年9月より開催されており、ボツワナ政府、在ボツワナの各国大使館、国際機関の代表が参加している。

### 5. 留意点

(1) ボツワナでは現地ODAタスクフォースが設置されており、一層の戦略的、効率的、効果的なODAの実現に努めている。

(2) 2008年8月現在、ボツワナは我が国とクールアース・パートナーシップを構築している。

表-4 我が国の年度別・援助形態別実績（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）  
（単位：億円）

年 度	円 借 款	無償資金協力	技 術 協 力
2003年	—	0.74	2.85 (2.83)
2004年	—	0.10	2.64 (2.60)
2005年	—	0.35	1.95 (1.91)
2006年	—	0.18	2.37 (2.25)
2007年	—	0.15	1.79
累 計	132.46	29.60	45.59

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。  
 2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力和日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。  
 3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。また、( ) 内の数値は債務免除額。  
 4. 2003～2006年度の技術協力においては、日本全体の技術協力事業の実績であり、2003～2006年度の( ) 内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2007年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

## ボツワナ

表-5 我が国の対ボツワナ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	政府貸付等	無償資金協力	技術協力	合計
2003年	-4.31	2.78	2.79	1.27
2004年	-4.17	0.92	1.88	-1.38
2005年	-7.97	5.28	1.84	-0.86
2006年	-6.04	4.54	1.75	0.25
2007年	-6.72	2.47	2.02	-2.22
累計	56.22	36.83	39.50	132.54

出典) OECD/DAC

- 注) 1. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額(政府貸付等については、ボツワナ側の返済金額を差し引いた金額)。  
 2. 技術協力は、JICAによるもののほか、関係省庁及び地方自治体による技術協力を含む。  
 3. 四捨五入の関係上、合計が一致しないことがある。  
 4. 政府貸付等の累計は、為替レートの変動によりマイナスになることがある。

表-6 諸外国の対ボツワナ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合計
2002年	米国 22.39	ドイツ 4.52	ノルウェー 3.17	英国 2.16	オランダ 1.85	-0.13	36.73
2003年	米国 13.28	ドイツ 4.11	ノルウェー 1.48	デンマーク 1.40	日本 1.27	1.27	27.36
2004年	米国 21.14	ドイツ 3.78	フランス 1.90	ノルウェー 1.64	デンマーク 1.26	-1.38	31.84
2005年	米国 17.96	ドイツ 3.45	ノルウェー 2.17	カナダ 1.88	フランス 1.36 デンマーク 1.36	-0.86	30.02
2006年	米国 24.75	ドイツ 2.70	ノルウェー 1.96	カナダ 1.71	スウェーデン 1.63	0.25	36.25

出典) OECD/DAC

表-7 国際機関の対ボツワナ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	その他	合計
2002年	UNHCR 1.55	UNFPA 1.28 UNICEF 1.28	-	UNTA 1.21	UNDP 0.47	-3.60	2.19
2003年	UNFPA 1.73	UNTA 1.57	UNHCR 1.48	UNICEF 1.30	UNDP 0.48	-4.43	2.13
2004年	GFATM 9.02	CEC 3.53	UNHCR 2.18	UNTA 1.68	AfDF 1.55	-1.08	16.88
2005年	CEC 17.60	UNTA 2.31	UNHCR 1.95	UNICEF 0.98	UNFPA 0.89	-4.31	19.42
2006年	CEC 27.51	GFATM 2.80	UNHCR 1.46	UNTA 1.28	UNICEF 1.00	-3.58	30.47

出典) OECD/DAC

注) 順位は主要な国際機関についてのものを示している。

表-8 我が国の年度別・形態別実績詳細 (円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース)

(単位：億円)

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2002年度までの累計	132.46億円 (内訳は、2007年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 ( <a href="http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html">http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html</a> ))	28.07億円 (内訳は、2007年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 ( <a href="http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html">http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html</a> ))	34.20億円 研修員受入 244人 専門家派遣 6人 調査団派遣 96人 機材供与 138.06百万円 協力隊派遣 164人 その他ボランティア 3人
2003年	なし	債務救済 0.74億円 (0.74)	2.85億円 (2.83億円) 研修員受入 30人 (29人) 専門家派遣 5人 (5人) 機材供与 12.2百万円 (12.2百万円) (協力隊派遣) (14人) (その他ボランティア) (2人)

年度	円借 款	無 償 資 金 協 力	技 術 協 力
2004年	債務免除 (36.74)	0.10億円 草の根・人間の安全保障無償 (1件) (0.10)	2.64億円 (2.60億円) 研修員受入 35人 (33人) 機材供与 9.50百万円 (9.50百万円) (協力隊派遣) (10人) (その他ボランティア) (4人)
2005年	なし	0.35億円 草の根・人間の安全保障無償 (4件) (0.35)	1.95億円 (1.91億円) 研修員受入 26人 (24人) 機材供与 11.32百万円 (11.32百万円) (協力隊派遣) (17人) (その他ボランティア) (6人)
2006年	なし	0.18億円 草の根・人間の安全保障無償 (2件) (0.18)	2.37億円 (2.25億円) 研修員受入 47人 (43人) 専門家派遣 1人 (1人) 留学生受入 1人 (協力隊派遣) (5人) (その他ボランティア) (2人)
2007年	なし	0.15億円 草の根・人間の安全保障無償 (2件) (0.15)	1.79億円 研修員受入 41人 協力隊派遣 8人 その他ボランティア 2人
2007年 度までの 累計	132.46億円	29.60億円	45.59億円 研修員受入 414人 専門家派遣 12人 調査団派遣 96人 機材供与 171.04百万円 協力隊派遣 218人 その他ボランティア 19人

- 注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。  
 2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力和日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。  
 3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。  
 4. 2003～2006年度の技術協力においては、日本全体の技術協力の実績であり、2003～2006年度の（ ）内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2007年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。  
 5. 調査団派遣にはプロジェクトファインディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。  
 6. 四捨五入の関係上、累計が一致しないことがある。

表-9 2007年度草の根・人間の安全保障無償資金協力案件

案 件 名
ティリサニョ医療車両整備計画 トロックウェン・エイズ治療施設建設計画

図-1 当該国のプロジェクト所在図は709頁に記載。

